

2 リスク感受性向上に関する研究 —現場作業員への効果的な情報発信に関する検討—

小倉 有紗

1 はじめに

現場で不安全事故等が発生すると、その情報を社内に周知し、類似事象の再発防止に努めることが重要になります。この情報提供時にどのような工夫があれば、将来、その情報を活かして事象につながり得るリスクを発見できる可能性が高まるのでしょうか。

記憶研究の分野では、「自己参照効果」といって、自分に関連付けて覚えた物事はよく記憶されることが知られています¹⁾。そこで、今回は、リスク情報の提供場面を想定し、現実に近い条件で実験を行い、自己参照効果を検証してみることにしました。

2 内容

(1) 実験参加者

オンライン調査会社のモニタに登録している 20～50 代の成人男女を対象としました。以下に述べる「実験 A」、「実験 B」の両方に回答し、分析の対象となった参加者は男性 94 名(49.50 ±7.78 歳)、女性 106 名(38.11 ±9.83 歳)の計 200 名でした。

(2) 方法

実験はオンラインで実施し、実験参加者はパソコン又はスマートフォンから画面に表示される質問に回答することで実験に参加しました。なお、実験の方法については、事前に大阪大学大学院研究倫理委員会の承認を得ました。

① 実験 A

実験 A では、登場人物が小さな事故に巻き込まれる内容の 200 字程度の文章を 10 個読んでもらいました。取り上げた事例は全て駅のコンコースで発生していました。

10 個の事例のうち半数を「自己参照条件」、残りを「対照条件」に割り当てました。自己参照条件では、事例を提示した直後に、「将来、あなた自身に同じような事態が起こる可能性があるか」という、自分に当てはめて考えることを促すような質問をして、「1: そう思わない」から「4: そう思う」までの 4 段階で回答してもらいました。一方、対照条件では、「A さんが落としてしまったものは何ですか」など、文章を最後まで読むと回答が可能な 4 択式の質問に回答してもらいました。

10 事例のうち、どの事例を自己参照条件に割り当てるのか、また自己参照条件と対照条件のどちらを先に提示するのかは、参加者同士で偏らないようにしました。

② 実験 B

実験 A の約 10 日後に実験 B に回答してもらいました。実験 B では、図 1 のようなイラストを示し、【1】～【8】の番号の振られている人物が登場する事例が、実験 A に含まれていたかどうかを思い出して回答してもらいました。

なお、実際に実験 A に含まれていたエピソードは 6 個ありました。



図 1 実験で用いたイラスト

3 結果

実験 B において正しい判断ができたかどうかを信号検出理論という手法を用いて得点化し、自己参照条件と対照条件とで比較しました。その結果を図 2 に示します。自己参照条件の事例は、対照条件の事例よりも有意に記憶成績が高いことが確かめられました ($t(199) = 3.08, p < .01$)。

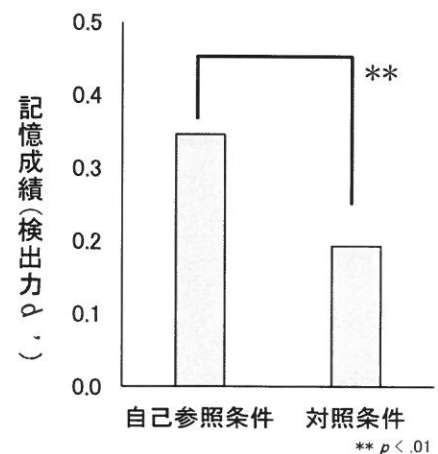


図 2 各条件の記憶成績

4 まとめ

従来、「自己参照効果」は、単語を覚える課題などを用いて、厳密な実験室実験で検証されてきました¹⁾。しかし、今回、事故情報を記した文章を、1 週間以上おいてから思い出させるという、現実場面に近い条件で実験を行っても、自己参照条件で記憶成績が高いという結果になりました。

この結果は、掲示や点呼で「当社で最近発生した事象」を紹介したり、勉強会で「他山の石」として他会社の事例を学習したりする際に活かすことができると考えます。つまり、「自箇所でも発生する可能性があるか」など、自分ゴト化して考える機会を設けることで、よく記憶され、後日、類似した状況に遭遇した際に、過去に学んだ内容を思い出し、早期にリスクに気付ける可能性が高まることが期待されます。

【参考文献】

- 1) Klein.S.B. Self, memory, and the self-reference effect. *Personality and Social Psychology Review*. 16(3), pp.283-300. 2012.